町史とっておきの話 195

神奈川大学非文字資料研究センター協力研究者
ルシーニュ・フレデリック

教育の水準と民俗の記録

▲民具カードを整理する町民（平成２年）

只見町の年配の方々からお話を伺った時、最初にうけた印象は性別にほとんど関係なく識字率が高いことと、農業法などの近代的技術も含めて学問に対する熱心さが伝わってくるということでした。もちろん外国人である私にはその水準を正確に計ることができませんが、私たちに対する町民の方々の優しい待遇の裏には学問に対する関心の深さもあるのではないかと思いました。他所の人に、自分たちの民俗文化を何時間も丹念に飽きずに語るのを見て、少しずつ只見町の教育について興味を持ち始めました。

そこで、神奈川大学ＣＯＥプログラムとは別に、佐野賢治先生ゼミの大学院生による民俗調査団が２００８年３月に刊行した『大倉の民俗―福島県南会津郡只見町大倉―』（佐野賢治編）のなかで、教育についての簡単な報告を書きました。私たち院生による民俗調査団には、オーストリアからサイモンさん、韓国から林淑姫さん、そしてフランスからは私という３人の留学生がいました。ここにベテラン調査員の小松大介さんや古谷野洋子さんなどが参加していて、国際的でとても有意義な民俗調査を経験することができました。なにより有り難かったのは、町民の方々にお会いする度に学生と住民が学問の楽しさを一緒に共有できる機会を多くいただいたことです。

私にとって只見は紛れもなく外国です。それでも、明治時代から始まった欧米との交流が長くなったお陰で（いい面と悪い面も）、只見町の住民も欧米人である私も近代化の経験を共に持っていると感じました。また、教育について調べたところ、戦後、只見町では多くの農家の子どもたちに高等学校や大学へ進学するチャンスを与える社会を作っていこうという地域あげての努力があったそうです。そこからもこの地域での教育や学問への熱意を垣間みることができます。そしてこれが私たち大学院生による調査を支持してくれた基盤になっていると思いました。

只見町の伝統的な生活様式が近代化したのは、田子倉ダムが竣工した以降の高度経済成長期（昭和30年代）の頃だそうですが、それを思えば、前近代的な民俗文化がわりと最近まで存在していたと言えます。さらに、その時代を生きた方々が、まだ町内にはたくさんおられます。そのお陰で、いわゆる「伝統的社会」の消滅という中にあっても、只見町の住民が自分の力で民具カードを記録したのです。近代教育の普及と只見町民の学問への情熱がもたらした興味深い成果だと思います。

只見町の民俗文化は、気候的には厳しい冬、地理的には深い山という特殊な自然環境から生まれたものです。これに加えて只見町民が近代化の過程で培った文化や学問に対する熱意、そして戦前を経験された話者が健在であるという民俗学にとって極めて恵まれた環境が相まって、「只見方式」による民具整理やカードへの記録、さらには作業工程表を編集するという偉業を達成できたのだと思います。これらの好条件があったからこそ、只見町という地域で世界初のインターネット・エコミュージアムが誕生したのだと確信しています。

▲完成した『大倉の民俗』